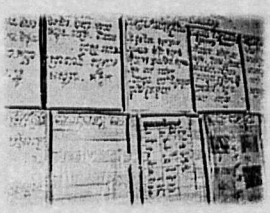
カンボジアの教育事情









この 100 年間、カンボジアの歴史は苦難の連続でした。
19 世紀後半からフランスの植民地下におかれ、1953 年に独立したものの、その後は内戦やインドシナ戦争で爆撃を受け、70 年代後半にはポルポトによる虐殺、さらに再度の内戦へと続きました。特にポルポト時代は 200～300 万ともいわれる人々が処刑され、カンボジアの国土と人心は荒廃しました。
未だに基礎教育を受けられない子どもも大勢います。 ある国際機関の統計では、初等教育純就学率は全国平均で 82%、小学校 5 年まで学校に在学する生徒数はその 45%です。しかし、農村部では自給自足で現金収入が少なく、金額に換算しても都市部の収入の 1/3 以下にすぎず、小学校卒業率が 1 割にも満たない村があります。
子どもたちが学校に行けない理由は、貧困ゆえに教育費用を捻出できず、学校を中退して働いたり、家事を一手に引き受けたりするからです。また教師や校舎の不足、高い教育を持つ人々を処刑したポル・ポト時代の記憶から、教育を受けることに対する不安なども原因です。 カンボジアのある NGO の統計では、カンボジアの性産業で働く人口の約 30%が 18 歳未満です。非識字者が 90%に達する地域もあり、字が読めないために情報が入手・理解できず、人身売買ブローカーにだまされてしまうこと等が原因です。

・・・カンボジアとゴミ山・・・

ゴミ山という場所はプノンペンの中心地から 5 キロほどの郊外にあるゴミ集積所です。そこにはプノンペン中のゴミが収集車で回収されその回収されたゴミの終着地です。
プノンペンにはゴミ焼却施設も、埋立地もありません。ゴミは分別して回収されず生ゴミも燃えるゴミも燃えないゴミもただ一箇所に集まり、ゴミの山となるのです。
その山で何百人という数の人がゴミの中から金属や、プラスチック、ペットボトルなどのお金になるゴミをあさっていてその中の約半分が小学校に通っているであろう年齢の子供達です。
カンボジアの平均気温は27度、暑いときは35度を超えます。その焼けるような日光にゴミは自然発火を起こし、山は火山のように煙をあちこちで上げていてときには1メートル先が見えないほど濃いときもあります。ビニールやプラスチックが燃えているので煙は有害でダイオキシンも大量に発生しています。
朝から晩まで何億という蝿のなかで働くので泥とゴミに汚れますがその汚れを洗い落とす水はどこにもありません。そうやって人々はゴミ山で働き、ごみ山の近くに集落をつくり、今にもつぶれそうな小屋を建て生活をしています。その環境は劣悪で水道も電気もなく排水設備も当然ありません。
ゴミ山とはそういった場所です。